

(同第六卷第九号)

なお、右記事中の出版物とは『木魚遺響』(明治四十二年。芸艸堂)、『黙語図案集』(同、同)、『黙語日本画集』(同、同)、『黙語西洋画集』(同四十三年、同)等をさす。

⑧ 國華俱樂部設立

明治四十一年七月五日、正木直彦が中心となって美術界の社交機関として結成した國華倶楽部の発会式が上野の美術協会で行われた。参加者は凡そ百名で、シカゴ大学文学部教授マックリントット、杉原栄三郎、坪谷善四郎の講演や山下迂作等の狂言があった(『東京美術学校校友会月報』第七卷第一号)。同会は正木を幹事長とし、毎月の例会には講演会、作品展観、各種余興、俳句会等々を行なっただけでなく、特にはじめの頃は美術家懇親会を主催したり、美術行政に関して建議を行ない、あるいは国や東京府の諮詢に応ずるなど、積極的に活動を展開し、正木が退官した翌年の昭和八年に至って解散した。結城素明は同会について「正木先生と國華俱樂部」(『美育』第六卷第五号正木会長追悼号。昭和十五年五月)の中で次のように述べている。

處で正木先生は明治三十四年八月、久保田鼎校長の後任として東京美術學校に赴任せられた折、従前より岡倉先生とは昵懇の仲でもあったので種々學校行事につき相談もし、前記の美術院より下村觀山、寺崎廣業、小堀輛音三氏を引き抜き教授にする等格別

の交渉がありました。岡倉先生のなされた日本繪畫協会の仕事に倣はれてか、學校派と在野美術家との融和、連結を謀る事がやはり斯道の發達、發展に必要であると考へられて明治四十一年に美術界の名士、愛好者並に美術、新聞記者其他を會員とする國華俱樂部を創立し、自ら會長となつて、右手に學校、所謂官、左手に國華俱樂部、所謂野と言ふ具合にこの兩者を左右に持して美術行政を圓滑に進められて來たのであります。

扱てこの俱樂部は會費制度として毎月懇談例會を開いたもので、美校俱樂部、上野公園内精養軒、同韻松亭、又は同俱樂部で買収した下谷鶯谷の料亭伊香保樓等を會場として、會員各自が自作品、收藏品などを持參して鑑賞、懇談しあい、籤引をして交換したり、種々の餘興も出たりして誠に趣好に富み、風雅に時を過したもので盛時には二百五十名以上の集合もあつた程でありました。そして時には斯道の大家、有力者を招聘して講演會を催し、その講演速記録を編輯、本として發行する等各位の意志の疏通を計り、日本美術の全般に亘り知らず／＼にその向上發展を期せしめて今日世界に誇る日本美術工藝の基礎を植ゑつけられたのであります。

⑨ 第二回文展と国画玉成会第一回展

第二回文展は明治四十一年十月十五日から十一月二十三日まで上野公園桜が丘の日本美術協会展品館および旧東京勸業博覽會第二号館で開かれた。このときは日本画部門で旧派の正派同志會が巻き返しの挙に出た。すなわち、明治四十一年七月、第二次桂内閣が成立